



「牛人工授精普及システム」コースでは、乳用牛の育種改良のため、乳房の形状など、雌牛の体型審査方法も学ぶ

飼養管理の改善、  
新技術の開発・実用  
化、牛の個体識別  
(トレーサビリティ)、  
飼料作物種

団体 独立行政法人  
家畜改良センター

**畜産の発展と豊かな  
食生活のために**

国内外の畜産業の発展のため、国内11カ所の牧場と連携して多種多様な事業を行う家畜改良センター。開発途上国に対する技術協力にも力を入れ、JICAの研修に協力している。

近年、世界各地で牛海綿状脳症(BSE)や高病原性鳥インフルエンザなど、家畜にかかわる問題が相次いで取りざたされている。家畜をめぐる食への不安が高まる中、安全で安定した食料供給に向けて、畜産技術の向上に貢献しているのが、独立行政法人家畜改良センターだ。

世界の畜産問題に  
対応する事業

福島県西白河郡に本部を置く同センターの歴史は古く、1872年にまでさかのぼる。当初は軍馬育成の牧場として設立されたが、1946年に農林省(当時)の種畜牧場に改編、90年に現在の名称になった。国内に11の牧場を有し、さまざまな事業を展開している。その内容は、家畜の改良増殖と飼養管理の改善、新技術の開発・実用化、牛の個体識別(トレーサビリティ)、飼料作物種の生産性向上を目指し、ロックフェラー財団やビル&メリンダ・ゲイツ財団の支援を受けて立ち上がった組織で、品種改良や土壌改良などの研究支援や人材育成などを行っている。

研修員のニーズに応じたプログラムを実施

海外技術協力の柱の一つが、JICAとの連携事業。海外からの研修員の受け入れや現地への専門家派遣のほか、青年海外協力隊候補生の技術補完研修、JICA職員への研修も要請に応じて実施している。

また、研修員の帰国後のフォローアップの一環として、同じ国の研修員同士が技術共有するためのネットワーキングも推進している。すでにパナマとニカラグアではネットワーキングの提案を行ってきており、帰国研修員の連携による技術普及の促進が期待されている。こうした多面的なアプローチにより、センターは国内だけでなく、途上国の畜産分野の発展と豊かな食生活のためにさらなる貢献を目指す。

独立行政法人家畜改良センター  
〒961-8511 福島県西白河郡西郷村大字小田倉字小田倉原1  
TEL: 0248-25-6163 FAX: 0248-25-3990  
Email: inquiry@nlbc.go.jp URL: http://www.nlbc.go.jp



JiCafeでは、各事業の動きやJICAパートナーの紹介、イベント報告などJICAの最新動向をお伝えします。

**大島副理事長、アフリカ  
3カ国などを訪問**

1月7日~16日、大島賢三副理事長は就任後初めての海外出張として、シエラレオネ、ガーナ、ケニア、イギリスを訪問した。5月に開催される第4回アフリカ開発会議(TICAD)の準備の一環として、各国で、平和構築や農業分野の協力などについて意見交換した。

「平和の配当」を  
実感できる社会に

シエラレオネでは、20年にも及んだ内戦の終結から5年がたち、復興・開発が進んでいる。大島賢三副理事長は、コロマ大統領をはじめとする政府要人や国連シエラレオネ統合事務所(UNIOSIL)関係者と面談するとともに、内戦で大きな被害を受けたカンピア県における農業・農村開発、給水分野のプロジェクト現場を視察した。カンピア県での協力は目に見える成果を挙げつつあり、厳しい環境の中で現地の人々とともに活動するJICA専門家に厚い信頼が寄せられている。大島副理事

他機関と連携して  
コメ増産を目指す

続いてガーナでは、コフィ・アナン前国連事務総長、ネリカ米を開発したモンティ・ジョーンズアフリカ農業研究フォーラム(FARA)代表、政府要人と面談し、アフリカ農業支援の方向性と、アナン氏が理事長を務める「アフリカにおける緑の革命のためのアライアンス(AGRA)」との連携の可能性について意見交換した。AGRAは、アフリカの小規模農家

長は日本の協力に対する感謝の証として、名誉大首長(パラマウン・ト・チーフ)に任命された。JICAが同国への協力を再開して3年になるが、人間開発指数が177カ国中最下位であるなど、内戦の傷跡は深く、復興の道のりは決して容易なものではない。コロマ大統領らとの意見交換では、人々が「平和の配当」を実感できることが重要であり、日本が議長国を務める国連平和構築委員会ですべてに策定された「平和構築協力枠組」を踏まえつつ、特に喫緊の課題である電力の復旧などの協力を進めていくことで認識が一致した。

またケニアでは、昨年末の大統領選挙に伴う政局の混乱と治安の悪化により、当初予定していた英国国際開発省(DFID)高官と、DFID・JICA両事務所長らが一堂に会するワークショップは見送られたが、日本大使館やJICA事務所などとケニア情勢や関係者の安全管理について確認。さらにナイロビに



ネリカ米の開発者、モンティ・ジョーンズFARA代表と面談した大島副理事長

あるAGRA本部を訪問し、ンゴンギ総裁と今後の連携について意見交換を行った。最後に立ち寄ったイギリスでは、マーロック・ブラウン外務担当閣外大臣、DFID高官と面談し、援助における日英連携強化の進め方などを確認した。

今回の出張は、今年5月の第4回アフリカ開発会議(TICAD)に向けた準備の一環で、非常に実りの多いものとなった。大島副理事長は「成果をTICADの成功につなげていきたい」と話している。



# INFORMATION

数名が出席、第4回アフリカ開発会議（TICAD）とG8サミットの主催国として国際社会における指導力をアピールする場となった。

日本政府からは福田首相と閣僚が出席、第4回アフリカ開発会議（TICAD）とG8サミットの主催国として国際社会における指導力をアピールする場となった。

### 緒方貞子理事長、ダボス会議に出席

1月23～27日、スイスのダボスで世界経済フォーラムの年次総会（ダボス会議）が開催され、緒方貞子理事長が出席した。

今年のテーマは「協調する革新の力」。各国の財界人や学者、文化人など約2500人が集まり、懸念されている金融危機や世界経済のほか、気候変動、保健衛生、社会不安、科学技術などについて議論した。

緒方理事長は、25日に「Global Poverty, TICAD, and the Japanese G8」と題するセッションでロックバンドU2のボノ氏と共同議長を務めた。また、26日の人間の安全保障をテーマとするセッションでも議長を務めたほか、グローバルガバナンスや気候変動に関するセッションにパネルとして参加。アフガニスタンのカルザイ大統領など要人との会談も行った。

# JICA STAFF @ HEADQUARTERS



### 「信頼関係から生まれる国際協力」

JICA農村開発部職員  
**伊藤 圭介** さん  
Ito Keisuke

農村開発部の伊藤圭介さんは、ボリビア事務所に3年半勤務した後、海外研修制度を利用して現地の大学院で「持続可能な開発」を学んだ。約5年間のボリビア時代を振り返りながら、農業を介した国際協力に対する思いを語ってくれた。

### 学生時代に中南米を放浪

大学で農業経済学を専攻していた伊藤圭介さんは、海外へのあこがれから、将来国連に就職したいという思いを漠然と抱いていた。「国際公務員になるには、国連公用語を2つ習得する必要があることを知り、スペイン語を身に付けるため、大学を休学して中南米放浪の旅に出ました。」

目の当たりにしたのが開発途上国という未知の世界。「それまで先進国しか行ったことがありませんでした。途上国のすべてが良い意味でも悪い意味でも新鮮で、素直にその魅力に引かれました。」

帰国後は国連就職のステップとして大学院の受験勉強に励んでいたが、ある就職場でJICAの存在を知り就職説明会に参加。「国際協力という形で途上国にかかわるのもいいかも」と方向転換し、JICAへの就職を決めた。

### 「農民との対話」から得たもの

初めての海外赴任は1999年、ボリビア事務所だった。念願がなつて農業・農村開発分野の担当になったが、最初の難関は農業の専門性とはかけ離れたものだった。「担当事業の対象地域が農民運動の中心地で四苦八苦しました。」

当時ボリビアは農民運動が盛んで、日常的に道路封鎖が発生していた。当然、JICAの事業にも障害が出る。何か良い解決策はないかと思案し、何度も現場に通った。また、事務所に突然やって来る農民の声に常に耳を傾けた。

そこで感じたことは信頼関係の

重要性。「何をしても信頼関係がなければ成り立たない。信頼関係ができて初めて本題の国際協力の話ができるのです」。関係者との信頼関係が深まれば深まるほど、日々の仕事が楽しくなり、業務の効率も上がった。

しかし、それはあくまでスタート地点だという。単に現場の話を聞いているだけでは、現場に流されてしまいがち。大切なのは、現場の多様な声を理解し、判断する自分なりの考えを持つことだと感じました。

JICAの海外長期研修制度を利用して現地の大学院に進学した理由も、「一つの国の開発を熟知することにより自分の考えの核をつくりたかった。その核はどんな仕事でも応用可能で」

2004年6月に約5年のボリビア滞在を経て帰国、現在は農村開発部で部内および部署間の管理・調整業務に携わる。

最近では内部の「バイオ燃料検討会」の一員としても活躍しており、昨年11月にバイオ燃料調査のためブラジルに赴いた。「今後、バイオ燃料はその是非はともかく間違い



バイオ燃料調査の一環で、セアラ州のバイオ燃料用作物の導入を通じた農民の組織化・生計向上を図るプロジェクトを視察し、農民から話を聞く伊藤さん

なく途上国で生産・活用される動きが広まっていく。その動きが地球環境に優しく、貧困削減に資するために、どんな協力が可能か考えていかなければなりません。バイオ燃料はJICAにとって新たな分野であり、苦労は多いがやりがいも感じている。

さらに、国内の国際協力にも関心を持つ。「ボリビアで体験したことは、本当に貴重な経験だと思っんです。自分の途上国での経験を日本の子どもたちに伝えていきたい。」

ボリビアでの経験がすべての基盤になっているという伊藤さん。「有言実行」をモットーとする彼なら、その基盤を糧に、やりたいことを実現していくに違いない。

### 「現職教員特別参加制度」DVDマルチメディア教材



JICAは、国立・公立学校の教員が身分を保持したまま青年海外協力隊に参加するための「現職教員特別参加制度」を紹介するJICA Netマルチメディア教材「世界に飛び出すみんなの先生」を制作した。

この教材は、同制度を利用し協力隊に参加している「小学校教諭」隊員の映像を中心に収録。開発途上国の小学校で奮闘している姿や、帰国後に協力隊の経験を生かして活動している様子などを紹介し、現職教員の協力隊参加の意義を伝えている。今後、教育関係のイベントや研修での活用を呼び掛けている。

同教材はJICA Netホームページ（<http://www.jica-net.com/ja2/ido/hb.html>）上でも閲覧可能。

問 JICA青年海外協力隊事務局  
TEL 03-5352-5559

### 「野口英世アフリカ賞基金」寄附のお願い

2006年5月の小泉首相（当時）のアフリカ訪問をきっかけに創設された「野口英世アフリカ賞基金」。同基金では、黄熱病の研究に身を捧げた野口博士の志を引き継ぎ、世界の保健・福祉の向上に貢献することを目的として、アフリカの医学研究や医療活動の分野で業績を挙げた研究者および医療従事者を支援しています。

受賞者は、5年ごとに開催されるアフリカ開発会議（TICAD）に合わせて決定されます。記念すべき第1回目の授賞式は、今年5月に横浜市で開催されるTICADで行われる予定です。

同基金では、政府の資金に併せて、個人、団体、企業など民間からも寄附を募っています。詳細はJICAホームページ（[http://www.kfujica.go.jp/kitu\\_info/3\\_1.html](http://www.kfujica.go.jp/kitu_info/3_1.html)）をご覧ください。同基金の趣旨に賛同してくださる方のご協力をお待ちしております。

問 JICA国内事業部  
TEL 0800-100-5931  
（フリーコール、平日10時～12時半・13時半～17時）

### JICA地球ひろば「元氣！アフリカ!!」展

JICA地球ひろば体験ゾーンでは、第4回アフリカ開発会議（TICAD）の開催に先立ち、「元氣！アフリカ!!」展を行います。人類発祥の地で育まれた文化や歴史の数々を紹介する展示をはじめ、社会的不平等や保健医療の遅れなど地域が抱えるさまざまな課題から、順調な経済成長を背景にビジネスパートナーとして注目される活気のある側面まで、写真・映像・資料などで体感していただきます。

セミナーや写真展、映画上映会、コンサートなど、アフリカを支援するNGO団体によるイベントも予定されています。楽しみながらアフリカをより深く知ることができる機会です。皆さまのご来場をお待ちしております。

会期 3月4日（火）～4月27日（日）10時～20時（月曜閉館、土日祝は18時まで。初日は13時半閉館、最終日は正午閉館）

会場・問 JICA地球ひろば（東京都渋谷区広尾）地球案内デスク  
TEL 0120-767278  
URL <http://www.jica.go.jp/hiroba>